

『白痴』を読む：街をさまようムイシュキン公爵

小嶋 祥三

『白痴』の第1編は、ロシアへ向かう列車の中から始まり、ナスターシャ・フィリポヴナの家でのパーティで終わる長い、長い1日の物語である。ムイシュキン公爵の愛の告白を退けたナスターシャは、ロゴージンとともに家を後にするが、結局、ロゴージンのもとから逃げ出してモスクワに向かった。ロゴージン、そしてムイシュキン公爵もかの女を追うようにしてモスクワに向かう。モスクワでもロゴージンから逃げ出したナスターシャはペテルブルグに舞い戻ったようである。第2編は6ヶ月間留守にしていたペテルブルグに公爵が帰ってきてからの話しである。

興味のきっかけはナイフである。エパンチン将軍の家でナスターシャの写真をみたムイシュキン公爵はかの女の本質を理解した。美しい顔だが、傷つけられた自尊心の痛み、苦しみ、怒りをその中にみた。そして公爵は、ロゴージンはナスターシャと結婚するかと問われ、結婚しても直ぐに彼女を切り殺してしまうだろうと答えている。公爵は物語の初めにロゴージンとナスターシャの恋のナイフによる結末を予見しているのだ。ロゴージンがナスターシャを殺害し、その説明を公爵にしている個所は、スメルジャコフがイワン・カラマーゾフにフォードル殺害の様子を語るどころと、受ける印象がよく似ている。そして、スメルジャコフとイワンは「共犯」だ。ロゴージンとムイシュキン公爵も「共犯」なのだろうか。

さて、ムイシュキン公爵がペテルブルグに戻ってきたのは、レーベジェフがナスターシャの消息を伝えてきたからである。公爵はまずレーベジェフの家に行ったが、そこでのことは省略する。公爵はすでに気分が悪いようだった。そして、ロゴージンの家に向かうが、ドストエフスキーの特徴である感性が理性に先行することが起こっている。すなわち、ロゴージンの家を見つけたのは感性の方が先だった。ロゴージンとはモスクワでいろいろと話したようだが、ペテルブルグでの再会は緊張をはらんだものだった。公爵は列車で到着したその時から誰かに見張られているように感じた。ロゴージンの家でもいろいろと話されたが、ここでは関係するところのみを述べる。

二人はナスターシャについて話す。ロゴージンがナスターシャを切り殺すとか、ナスターシャがそれを予期していることが語られる。にもかかわらず、ムイシュキン公爵は、ぼんやりとしつつも、ナイフをもてあそぶ。ロゴージンがイライラしてそれを取り上げ本に挟み、公爵の手の届かないところに投げ捨てる。これは一体何を意味するのだろうか。この後、ロゴージンは公爵と身につけていた十字架の交換をし、母親に引き合わせて祝福を受けさせている。そして、ロゴージンは別れ際にナスターシャを公爵に譲るといふが、表情は苦痛に満ちていた。ロゴージンはこの後公爵をナイフで襲うことになるが、かれの家でロゴージンがとった一連の行動は、公爵を殺害したいという欲望を何とか抑えようと

しているように見える。この時点でかれが殺人を考えているとしたら、たとえナスターシャ殺害の欲望を持っていたとしても、その相手は公爵であって、ナスターシャではない。したがって、ロゴージンからみると、「共犯」ということは成り立たないだろう。

ところが、ムイシュキン公爵の方ははっきりしない、奇怪な行動をとる。公爵はロゴージンの家ですでに気分がすぐれず、テンカンの発作を予感していた。そのような状態で公爵はロゴージンの家を後にする。エパンチン将軍やコーリヤに会えなかった公爵は苦しいほど緊張した不安な気分でペテルブルグの街をさまよい歩く。これに続く個所はテンカンの予兆の状態を表現しようとしているのか、すべて曖昧に書かれており分り難い。

ムイシュキン公爵はいつの間にか駅におり、パーヴロスク行きの列車に乗り込んだ。これはアグラヤー（暗闇の光）のことを考えたかららしい。しかし、公爵は直ぐに列車から降りてしまう。公爵は何者かに付きまわられていると感じており、周囲を探した。と同時にそれとは別の品物に興味を引かれた。その品物はある店の飾り窓にあり、公爵が少し前に値踏みをしたものだった。これらは公爵が苦しんできた不安、暗い想いに関係するものだった。何者とはロゴージンのことであり、品物は鹿の角の柄のついたナイフで、ロゴージンの家にあったのと同じものだった。

ムイシュキン公爵はベンチで休んだ。その時テンカンについて考えているが、それは別にしたので省略する（このホームページの『ドストエフスキーを読む』を参照ください）。そして、レーベジェフの家や、途中で立ち寄った居酒屋で話題にした殺人事件について考えている。それはロゴージンがナスターシャを切り殺すという考えにつながった。公爵は「特別な目的」、「抑えがたい欲望」、「暗い悩ましい好奇心」、「思いがけない考え」でナスターシャが身を寄せている家を目指した。公爵はロゴージンの殺人やこれらの抑えがたい想いを恥じたが、どうしようもなかった。ナスターシャは不在だった。公爵は悪寒の中で「思いがけない考え」をはっきりと理解した。

「特別な目的」、「抑えがたい欲望」、「暗い悩ましい好奇心」、「思いがけない考え」などのあいまいな表現は何を語っているのだろうか。ムイシュキン公爵はこの家でロゴージンの「眼」をみたくてたまらなかった。公爵はロゴージンがナスターシャを切り殺すところに遭遇したかったのだろう。もしそうであるならば、公爵にとっては「共犯」だったかもしれない。無論、公爵が実際に手を下すことはなかっただろうけれど。これはイワン・カラマーゾフがスメルジャコフに父親殺しの「ゴー・サイン」を出した夜、2階の階段の上にて階下のフォードル親父に何か起こらないか期待していた、あの醜悪で卑劣な出来事に似ている。

この後、ムイシュキン公爵はロゴージンにナイフで襲われるが、テンカン発作が起こり命拾いした。しかし、それはここでのテーマではない。